2025年1月19日　説教「12人の弟子たち」

ルカの福音書6章12～19節

先週はルカの福音書6章冒頭から、安息日の労働を巡って、律法主義に走るパリサイ人たちとは異なる、イエス・キリストの教えについて学んだ。今朝は、イエスの働きが新段階を迎える出来事について読んでいく。

１．夜明けになって（12～節）

①祈るため山に（12）**「このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。」**

イエスは宣教前に、40日40夜断食をされましたが、その後もことあるごとに、人々から離れて祈りに専心されました。ここでも、イエスは山に行って祈りに集中されました。今回の祈りはいつも以上に熱がこもっていたと思われます。なにしろ夜中もぶっ通しで祈り、朝を迎えられたのです。

②弟子たちを呼びよせ（13）**「夜明けになって、弟子たちを呼びよせ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。」**

そして、夜が明け、太陽が東の空に上るころ、イエスは弟子たちを呼びよせられました。そして、祈りを通して導かれたことを彼らに伝えたのです。相当数いる弟子たちの中から12人を選ばれました。そして、彼らに使徒（アポストロス）という名をつけられたのです。使徒とは全権大使という意味であり、弟子たちからみれば光栄なことでした。私たちは「使徒の働き」を学んできましたが、それは12使徒たちと使徒パウロの働きを記した書でした（バルナバも使徒と記されていました）。

２．使徒となった人々（8節）

①ペテロなど（14）**「すなわち、ペテロという名をいただいたシモンとその兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、」**

ここに記されている弟子たちの中で4人は元漁師です。ペテロ（岩という意味）というニックネームのシモンとその兄弟のアンデレ、ゼベダイの子ヤコブとヨハネがその人たちで、漁業の最中にイエスに招かれたのです。ピリポはベッサイダ出身でナタナエルにイエスのことを伝え（ヨハネ1章）、五千人給食の場面でも登場しています（ヨハネ6章）。バルトロマイはヨハネの福音書に出て来るナタナエルのことと考えられます。

②マタイなど（15）**「マタイとトマス、アルパヨの子ヤコブと熱心党員と呼ばれるシモン、」**

マタイは取税人であったレビであり、主に招かれた記事がルカ5章にありました。トマスについては、イエスとの「道」問答（ヨハネ13章）や復活の主を見なければ信じないと言った末に、復活の主に出会って信じた出来事（ヨハネ20章）が思い出されます。アルパヨの子ヤコブについては、よくわかりませんが、14節に出て来るヤコブを大ヤコブと呼ぶ時に、アルパヨの子は小ヤコブと呼ばれます。熱心党はユダヤ教の中でも排他的で国粋主義を信奉する人々であり、このシモンもかつてはその派にいました。

③二人のユダ（16）**「ヤコブの子ユダと裏切ったイスカリオテ・ユダである。」**

ヤコブの子ユダはマルコの福音書ではタダイとあります。また、イスカリオテ・ユダについては、新約聖書を読む者が一度は、彼はどうして裏切ったのだろうかと考えさせられる人物でしょう。ある人は彼に同情するかもしれません。しかし、それは使徒ペテロが十字架の主の周辺で、三度も主を知らないと言ってしまったのとは根本的に違います。ユダが銀貨 30 枚でイエスを売ったことは、十字架が決定的になる行動でありました。人間的に同情するのではなく、むしろその罪を私たちが厳しくとらえる時に、福音の意味が迫ってくると考えます。

３．イエスの所に集まった人々（9～11 節）

①多くの弟子や群れが（17）**「それから、イエスは、彼らとともに山を下り、平らな所にお立ちになったが多くの弟子たちの群れや、ユダヤ全土、エルサレム、さてはツロやシドンの海べから来た大ぜいの民衆がそこにいた。」**

イエスは 12 弟子たちを選んだのちに、彼らと共に山を下られました。そして、平らな場所にお立ちになりました。すると、そこにはたくさんの弟子たちの群れと、民衆たちも集まっていました。その人たちはユダヤ全土から来ていて、エルサレムはもとより、遠くは地中海沿いの町ツロやシドンの町からもやっていました。

②病気を直してもらうため（18）**「イエスの教えを聞き、また病気を直していただくために来た人々である。また、汚れた霊に悩まされていた人たちもいやされた。」**

彼らの目的は、第一には主イエスの教えを聞くことでした。そして第二には、病気を直してもらうことでした。誰しも健康な身体を求めます。イエスは身体の健康以上に大切なことを宣教されていましたが、目の前の苦しみを持つ者の願いをお聞き届けくださっていたのです。汚れた霊に悩んでいる人々については、その悪しき霊を追い出して、癒してくださったのです。

③イエスにさわる（19）**「群衆のだれもが何とかしてイエスにさわろうとしていた。大きな力がイエスから出て、すべての人をいやしたからである。」**

群衆はイエスにさわっていやされようともしていました。マルコの福音書 5 章には 12 年の間長血を患っていた女性は、どこに行ってもよくならず、群衆のなかに紛れ込み、イエスの着物にさわったのです。そうすれば直ると考えたからです。実際すぐに、ひどい痛みが直ったのです。その時イエスも御自分のうちから力が外に出ることをお感じになられました。その時に、イエスの前に自分が触ったことを申し出ると、イエスは「あなたの信仰があなたを直したのです」と言われました。イエスは、いやされた者たちが、主なる神を信じることを求めておられるのです。

《結論》

「弟子」（マセーテース）という言葉には、学ぶ者という意味があります。イエスの弟子になるというのは、イエスから学ぶ人になるということです。今朝の聖書箇所からは、イエスの弟子になった人が相当数いることがわかります。それでは、イエスから学ぶというのは、何を学ぶのでしょう。第一には、イエス・キリストの教えを知ることです。山上の説教を聞いた人々の中から、弟子になった人々もおおぜいいたことでしょう。イエスの後についていき、その教えを貪欲に学ぼうとした弟子たちもいたことでしょう。第二には、イエス・キリストのご人格そのものから、何かを吸収して、イエス・キリストに似た者となりたいと願って、真似しようとした弟子たちもいたことでしょう。たとえば、イエス・キリストは光である方です（ヨハネ1:9）。弟子である者はどこまで行っても、光とはなりえません。しかし、エペソ人への手紙にこうあります。「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」（5:8）とあります。光であるイエスを目指していくことは、「光の子」となっていくことでもあるのです。光源とは決してなれませんが、それを映し出す存在にはなれるのです。

今朝の聖書箇所ではたくさんいる弟子たちの中から、キリストは 12 人を選ばれて、使徒としています。12 という数字はイスラエル 12 部族に対応しているといえるでしょう。イエスは夜通しで祈りながら、12 人を選ばれたのです。弟子たちを「使徒」とするのですから、熟考して選出されたことでしょう。それでは、どんなことを基準にして、イエスは 12 人を選ばれたのでしょう。それはここには記されていません。しかし、次のお言葉は参考になります。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」（ルカ 9:23）。要するに、自分を捨て、自分の十字架を負い、キリストに従ってくる人を見込まれて選出されたのでしょう。

若い頃に、「キリストの弟子となるために」というテーマのカンファランスに出たことがあります。その時の講師の先生がのっけから、「クリスチャンはみんなキリストの弟子なんですよね。」と言われて、「それでも弟子となるためにとあるのは、キリストの弟子である基準がどこにあるのかを知りたいからでしょう。」と続けられたことを覚えています。

それでは、あなたはキリストの弟子となりたいですか。こう問われると、何かこわい感じがするかもしれません。それでは、「あなたはキリストをもっと学びたいですか。」「あなたはキリストをもっと知りたいですか。」「あなたはキリストに似た者になっていきたいですか。」と問われたらどうでしょう。少し受け取りやすいかもしれません。この 2025 年に、私たちの群れに連なる者たちが「キリストの弟子となる」ことを意識し、その自覚をもって歩むことができれば良いなと考えます。そのために、キリストをもっと学び、この方を知っていきましょう。また、キリストに似せられていくように祈っていきましょう。「私はクリスチャンです！」と堂々と立証できる者たちにさせていただきましょう。